

多様性のある社会を

浜田市立旭中学校 一年 岡本一志

男性の二十人に一人。女性の五百人に一人。これは、日本人における、色覚特性を持つ人の割合です。僕もその中の一人です。

色覚特性とは、一言で言うと、多くの人には当たり前に見える色であっても違った色に見えるものです。つまり、色が区別しにくいということです。そのため、日常生活を送る上で困ることがあります。学校生活では、絵の具を使う時や黒板の文字をノートに写す時。細かい字や線の色を見分ける時。色が区別しにくく、色覚特性を持つ僕は不安になり、みんなと同じ色覚であればよかったなと思ってしまいます。両親も、僕の色見え方が、学校の先生や友達に受け入れてもらえるのか心配だったそうです。

「C・U・D」カラーユニバーサルデザイン。これは、色覚特性を持つ人も正常の人も、だれにとっても色が分かりやすいデザインのことです。僕たちの使っている学校の教科書にも使われていて、僕も色について悩むことなく、安心して使用することができます。

小学生の頃、絵の具の色が分からず友達に聞きました。恐る恐る聞いた僕に、馬鹿にした返しではなく、「これは、青色だよ。」と、親切に色を教えてくれ、自分と違う僕を受け入れてくれたのです。色を使った授業が不安で、悩んでいた僕の心が軽くなり、初めて自分の目のことを伝えることができました。この瞬間、周りの人の助けや理解が人を支えられることを、身をもって感じました。

振り返ると、自分では分からない色を教えてくれた友達。色覚特性について理解してくださった先生方。いつでも相談に乗ってくれた家族。本当に今までいろいろな人のお世話になってきました。色覚特性を持つ人は少ないけれど、そんな人たちのことを考えてくれる思いやりが嬉しいです。

ここで、自分の視野を広げて色覚特性のように、ほかの人と違いがある人たちのことを考えてみました。すると、身の周りにもいろいろな人がいることが分かってきました。例えば、右利きと左利き。ハサミやドアノブなど日ごろから使う生活用品は右利き用に作られていることが多いです。僕は、右利きなので不便さを感じませんが僕とは違う左利きの人が生活するのは、不便なことも多いでしょう。他にも、性的指向、障がい、アレルギーなどたくさんあります。

僕は、今の生活で、色覚特性だから「いやだ」と思うことはありません。なぜかというと、周りの人が助けてくれたり、世の中での理解が少しずつ深まってきたりしているからです。

このことから言えるのは、自分と違う人への理解が大切だということです。理解というのは、相手の特性を知り認めることです。人はそれぞれ違いがあって当然です。だから、その違いにマイナスイメージを持ったり、自分と違うから世の中に必要ないと思ったりはしてほしくありません。いろいろな特性や個性を持つ人がいる社会。その違いを理解して認め合える人が増えれば多様性のある社会になると思います。僕は特性や個性への理解と思いや

り、工夫があり、一人一人が活躍できる社会を創っていきたいです。そのために自分の経験から気づいた今回のことを多くの人に伝えていきます。